

第2回 稲の力

— 「悠紀齋田お田植神事」「御田扇祭り」を例として—

平成27年6月22日

1 日本人にとってのコメ（米）

(1) コメの歴史（赤米・黒米・白米）

コメ＝富とされ、以降明治時代の初期まで、コメは税としての役割を担ってきた。

江戸時代には、藩の大きさを石高で表し、給料もコメで払われていた。

各時代の権力者たちは、水田を含む領地をめぐって合戦を繰り返し、また稲作を発展させる為に様々な政策を施してきた。このように政治・経済・庶民（常民）のくらしの範囲で、コメは重要視されていた。

以下、各時代の特色をピックアップしてみる。

- ① 日本への伝来・・・弥生時代。現在では、縄文晩期とする説が有力。焼米
- ② 大和・・・・・・・・稲作技術の進歩
- ③ 奈良・・・・・・・・コメは貴族の主食。農民は、収穫した稲の3%を税として納める。この頃のコメの食べ方として、玄米を甑で蒸した「強飯」（こわめし）、水をたっぷり加えて炊く粥（かゆ）、ご飯を干した「ほしい」が挙げられる。
- ④ 平安・・・・・・・・生産力向上。平安後期は、戦乱が続き生産力が徐々に減少。固粥（かたかゆ）、姫飯（ひめい）が好んで食べられた。姫飯は粥より水分を少なめにした固めの粥のことで、現代人が食べているのが、この姫飯にあたる。
- ⑤ 鎌倉・・・・・・・・二毛作出現
- ⑥ 室町・・・・・・・・奈良時代の2倍の収穫量
- ⑦ 安土・桃山・・・・汁かけ飯の出現。この頃になると庶民の中にもコメを食べる人が増えてきた。
- ⑧ 江戸・・・・・・・・天保年間、国内の水田面積が、奈良時代の3倍まで膨れあがってきた。農民はというと「百姓は常に雑穀を食すべし、みだりに米を食むことを得ず」とされ、雑穀に草木を混ぜた雑炊を食べていた。江戸時代中期になると生活も安定し、武士の間で白米が食べられるようになり、農民も徐々にコメを食べるようになった。

⑨ 明治・・・・・・・・日本人の主食は、白米

(2) 穀霊

稲、麦、トウモロコシなどの穀類に宿る霊魂のことを指す。農耕民の多くが、毎年同じように芽を出し、成長し、実り、枯れる穀物に人間の一生を重ね合わせ、人間に魂があるように穀物にも魂がと見え、そして穀霊を保護し、祀ることによって豊作が得られると信じている。穀霊観念とこれに基づく儀礼・慣行は程度の差こそあれ、未開、文明を問わず、穀物栽培を生業とする諸民族に広く分布する。その典型的なものは稲作地帯に見られる。多くの事例は、稲の精霊・霊魂（**稲霊・稲魂**）が、人間と同様に**誕生（発芽）、成長、成熟、死（枯死）、再生**の過程を繰り返すとの観念に基づいている。

では、なゼイナヅマは、稲妻という漢字が当てられるのであろうか。

古代、稲の結実期に雷が多いことから、雷光が稲を実らせるという信仰が厚かったことによると言われている。そのため、稲妻は「**稲光**」「**稲魂**」「**稲交接**」（いなつるび）とも呼ばれ、頭に「**稲**」が付けられる。

2 悠紀齋田お田植神事

(1) 大嘗祭とは

大嘗祭は、天皇が即位の後、大嘗宮の悠紀殿、主基殿に初めて新穀を供え、国家・国民のためにその安寧と五穀豊穰などを感謝し祈念するもので、天皇一代に一度だけ行われる儀式（**踐祚大嘗祭＝せんそだいじょうさい**）である。大嘗祭を行うに当たり、その年の新米を作る田を齋田と称していた。

齋田は、京都以東以南を悠紀の地方、京都以西以北を主基の地方と定めている。**悠紀と主基は齋国（いつきのくに）**と言われていた。大正3年2月5日齋田**卜定**の儀が行われ、悠紀の地方は愛知県、主基の地方は香川県が選ばれた。

(2) 齋田地として選ばれた背景

齋田地として選ばれた理由・背景として、以下の3つの理由が伝承されている。

- ・耕地整理が完了していた。（明治34年着工、明治37年竣工）
- ・用排水路が整備されていた。（高橋用水・占部用水・安藤川が改修終了）
- ・交通の便が良かった。（西尾軽便鉄道の整備。中島駅・占部駅）

(3) 大嘗祭悠紀齋田・主基齋田の位置付け

私は、平成25年に、両齋田のお田植祭りを観察・調査を実施することができ

た。その結果、両齋田共に遺跡、願い、想いを保存会という組織を生かしながら現在に伝えようとする熱意と情熱を強く感じ取ることができた。このことから、両齋田の位置付けは、以下のように結論付けることができる。私自身は、折口説を基本的な捉えの中心に置きたいと考える。

大嘗祭が基本的には鎮魂の祭りであり、このテーマを鋭く論じたのが、折口信夫の「大嘗祭の本義」である。それによると『日本書紀』に見える「天皇霊」という語は先帝の外来魂を意味したが、新帝は大嘗祭においてこの外来魂をわが身に付け、新しい天子としての威力を生み出す（鎮魂の第一義）。ついで、即位した新帝は、自らに付着せしめた天皇霊を分割して、親しく近い人々に分配した。すなわち分割した魂を御衣（おんぞ）に付けて分配したのである。これを**天子の衣配（きぬくばり）**という（鎮魂の第二義）。天子は毎年の暮（冬）になると魂が須弱し浮動ししやすい状態になる。その不安定な状態を鎮めるために、宮廷では11月になると日を卜定して**たましずめ**の儀式を行った。つまり年ごとに行われる魂の強化であって、いわゆる鎮魂祭にあたるものがそれである（鎮魂の第三義）。

折口は、秋の終期に行われる収穫祭の根底に、秋から冬にかけて行われる鎮魂の観念を読み取ろうとしているのであり、それが天皇の代替りに際しては、先帝の霊（天皇霊）を新に付着させる観念と重層していたと考えた。いわば大嘗祭には、外来魂の付着と鎮魂という両義的な機能が含まれていたと結んでいる。

私自身の大嘗祭の捉えは、**国王の即位式に当るもので、魂の再生についての稲作農耕民族の伝統的な生命観・靈魂観に由来すると理解**している。

以上のような捉えで、再度、悠紀齋田の儀礼を見直して見よう。そのためにも、大嘗祭悠紀齋田の大正4年の儀礼の位置付けを検討する必要があると感じている。

- 1 齋田決定示達式 大正3年3月7日 午前10時30分 愛知県庁知事室
- 2 故「鶴田勝蔵」翁霊前報告祭 大正3年4月1日 八幡社
- ※大正3年4月11日明治天皇お妃「昭憲皇太后」が崩御され登極令第18条により大嘗祭は1年延期となる。
- 3 大嘗祭悠紀齋田祓式 大正4年4月22日 午前10時30分 悠紀齋田
- 4 齋田鋤入れ式 大正4年4月22日 午前12時 悠紀齋田
- 5 播種式 大正4年4月23日 午前6時 悠紀齋田
- 6 水口祭 大正4年4月23日 午前9時 悠紀齋田
- 7 **悠紀齋田御田植祭 大正4年6月5日 午前10時 悠紀齋田**
- 8 御田植祭祝賀会 大正4年6月5日 御田植祭終了後 六ツ美第三尋常
高等学校校庭
- 9 御田植終了報告祭と豊穰祈念際 大正4年6月7日 4号田御田植終了後 悠紀齋田
- 10 抜穂式齋場地鎮祭 大正4年8月15日 午前8時 悠紀齋田齋場予定地
- 11 抜穂前一日大祓の儀 大正4年9月19日 午後3時 矢作川大聖寺磧

12	悠紀齋田拔穂式	大正4年9月20日	午前10時	悠紀齋田齋場
13	供納米点検式	大正4年10月15日	午後	八幡社
14	齋田米供納式	大正4年10月16日	午後3時	京都御所
15	新穀供納祝賀記念式	大正4年10月21日	正午	愛知県商品陳列館
16	大嘗祭	大正4年11月14日		大嘗宮(仙洞御所)
	悠紀殿供饌の儀	大正4年11月14日	午後7時	大嘗宮悠紀殿
	主基殿供饌の儀	大正4年11月15日	午前1時30分	大嘗宮主基殿
17	大饗第一日の儀	大正4年11月16日	正午	名古屋市鶴舞公園
18	御大礼愛知県奉祝会祝賀会	大正4年11月17日	正午	名古屋市鶴舞公園
19	悠紀齋田奉賛会解散式	大正4年12月11日	午後1時30分	碧海郡役所
20	御下賜金品伝達式	大正5年1月6日		愛知県庁知事室
21	御下賜金伝達式	大正5年3月31日		六ツ美第三尋常高等小学校

(4) 平成26年6月3日(日) 悠紀齋田お田植祭り 当日の実際

- ◆ 6:00～ 苗取(加藤氏所有の苗場)
- ◆ 10:00～ 齋田準備
- ◆ 12:15～ 大正宮神事準備
- ◆ 12:20～ 清めの手水準備
- ◆ 12:30～ 大正宮祭殿開扉
- ◆ 12:31～ 神事
宮総代から清めの手水。続いて、町役員4名、祭礼担当者4名
- ◆ 12:35～ 玉串奉奠
- ◆ 12:50～ 終了

齋田公園に仮宮を設営し、神事を実施

- ◆ 13:30～ 六ツ美中学校ブラスバンド部リハーサル
- ◆ 13:50～ 清め(手水) 玉串奉奠
- ◆ 14:00～ 式典(開式のことば)
- ◆ 14:01～ 神事
 - (1) 修祓の儀 14:01
 - (2) 降神の儀 14:03
 - (3) 献饌 14:07
 - (4) 祝詞奏上 14:09
 - (5) 齋田の祓い 14:16
 - (6) 玉串奉奠 14:19
 - (7) 撤饌 14:30
 - (8) 昇神の儀 14:34

(9) 保存会長お礼のことば 14:36

(10) 来賓祝辞 14:39

(11) 閉式のことば 15:05

- ◆ 15:15～ お田植踊り
- ◆ 15:28～ 田均し
- ◆ 15:30～ 神主苗を田に入れる
- ◆ 15:31～ 苗を斎田に投げ入れる
- ◆ 15:32～ 早乙女田の回りに整列
- ◆ 15:33～ 苗渡しの子ども斎田の中へ
- ◆ 15:34～ 早乙女達によるお田植
- ◆ 15:45～ お田植終了

3 御田扇祭りの今

御田扇祭りは岡崎藩の大庄屋制度である手永制度のもと、藩領である手永単位で行われた祭礼・行事である。**※手永＝行政区域。大庄屋を配置。水野忠善時代に導入**

御田扇祭りの初見時期としては、現在のところ宝暦年間（1751～1763）が初見かと思われる。しかし、これが御田扇祭りの起源とは言えないが、現在受け継がれている祭礼・行事の基本形は、この時期には、岡崎藩領の中で行われていたことになる。

現在、この祭礼は、巡行していく形態を残している地域が2カ所、一部地域の町内だけで巡行していく形態が1カ所、氏神の中に合祀され、祀られている地域が3カ所である。この6カ所（A～F型に分類）の調査を3年に渡って記録したものである。

(1) A型（堤通り地域型）堤通り手永の場合

天保年間（1830～1843）の頃は、6月中旬頃より6～8日かけて各ムラを巡行（神輿引き継ぎ）する形態をとっていた。**弘化年間（1844～1847）以降より中之郷村より始まり、25カ村を数日かけて巡行し中之郷村へ帰ってくる形態に変化した。**

明治24年（残された記録から判断すると）からは、現在のような1年ごと、神輿を引き継いでいく形に変わった。

「岡崎藩萬書上」（寛政元年＝1789）の手永の規模は、石高：1,198,045石 人別：5,941人。以下の手永の規模は、「岡崎藩萬書上」による。

現在は、20町 {中之郷・上青野・高橋・上合歓木・下合歓木（以上、岡崎市）・高落・新村・西浅井・東浅井（以上、西尾市）・安藤・福桶・下三ツ木・上三ツ木・下青野・在家・土井・牧御堂・法性寺・宮地・赤渋（以上、岡崎市）} が参加。1年間は、受けた神輿を当番地域に留め置き、明くる年に次の町へ送る、順送りの形態

をとっている。いわゆる「順送り型」といわれるものである。堤通り手永、弘化年間の25ヵ村を記しておく。

下青野村 下土井村 在家村 上三ツ木村 下三ツ木村 上福桶村 下福桶村 安藤村 東浅井村 西浅井村 新村 高落村 下合歎木村 上合歎木村 高橋新田 中
青野村 上青野村 中之郷村 赤渋村 福島新田 久後村 宮地村 法性寺村 牧御堂村 上土井村である。

● 御田扇祭り巡行の実際

ここでは、平成24年7月22日(日)に行われた中之郷町から上青野町へ送る場面を報告する。

まず、中之郷神社を出発するときの行列の様子を記す。

先達：1人 大麻：宮司 白杖2本：2人 奴道中：子ども25人 救護班：3人 高張提灯2基：4人 梵天2本：6人 大幟1基：7人 花傘(中之郷) 1基：7人 神職：宮司 役員：6人 氏子総代：4人 大団扇2本：4人 榊樽：6人 唐櫃：4人 御幣：2人 御神輿：10人 大団扇2本：6人 花傘(宮地)：7人 花傘(赤渋)：8人 小幟20本：22人 太鼓放送車：2人 屋台：6人 大人神輿：11人 子ども会役員：1人 女性部役員：2人 女性部踊り：102人 一般奉賛者：5人 救護班2班：4人 記録係：5人 行列支援：12人 花火：4人 接待：8人 浦安舞：4人 合計340人

また、引き継ぐものとして、「御田扇神宮品目録」「御田扇御神酒料積立簿」「賽箱」である。本年、中之郷町から上青野町に送られた目録の中には、以下のような記載が見られる。

御田扇神宮品目録

- 一、御神輿 壺組
- 一、御神輿台 壺
- 一、傘 壺対
- 一、御神幣 壺
- 一、梵天 壺対
- 一、提灯 壺対
- 一、榊桶 壺
- 一、榊台 壺
- 一、小幟 貳壺拾本(ママ)
- 一、大幟 壺本

平成二十四年七月二十二日

中之郷町

当番

この記録は、明治24年(1891)から残されている。また、「御田扇御神酒料

積立簿「旧岡崎藩領分堤通」の記録簿には、明治24年3月18日に旧岡崎藩領分堤通手永御田扇に御神酒料として、旧領主本多家より、金5円が下賜された。この記載が、新しい姿の御田扇祭りを示す史料として位置付けられるように考えられる。

この記録の本年度分には、以下の記載がある。

記

一、金拾五圓六拾壹錢也

但し赤浜町より受領しました

右金額を上青野町に送付します

一、大麻料 金参阡圓也

当町にて納入しました

平成二十四年七月二十二日

中之郷町

本多 達夫印

山田 靖印

石川 義弘印

鳥山 照章印

近藤 和美印

清水 良治印

石川 菊次印

山田 文雄印

近藤 鐘印

とある。最後に引き継がれるものとして、「賽銭箱」が挙げられる。この賽銭箱には、昭和五十八年七月十七日の墨書銘があり、この年に下三ツ木町が新調し、寄贈している。

堤通り手永の御田扇祭りには、多くの祭礼道具が各町内、個人から寄附されている状況が確認された。その一端を示すと、大幟、梵天の台車、神輿台、神輿の担ぎ棒、神輿の上箱などが挙げられる。

(2) B型（山方地域型）山方手永の場合

山方手永は現在13町で神輿を巡行していく形態をとっている。巡行の順序は中村→坂左右→野畑→若松→針崎→柱→羽根→井内→下和田→国正→正名（以上、岡崎市）→永野（額田郡幸田町）→定国（岡崎市）であり、町を一つ飛ばしで神輿を引き継いでいく。いわゆる「飛ばし型」である。

近世後期の山方手永の規模は、25ヵ村、石高：9,998.045石。人別：5,941人。

大庄屋齋藤家居住下六名より占部用水筋25ヵ村を昭和初期まで盛大に陸渡御が行われていたと伝承されている。昭和16年より太平洋戦争のため中断したが、戦後の混乱期が過ぎ、社会経済が上向きかけた昭和31年7月7日より復活した。

昭和61年には、下六名、中六名、羽根、柱、針崎、若松、井内、野畑、下和田、坂左右、国正、中村、定国、正名（以上、岡崎市）、永野（額田郡幸田町）の15町で行われていたが、現在は13町で行われている。

大庄屋齋藤家は、江戸時代から屋敷内に寺子屋を開き、明治8年には、私財を投じて第68番小学校を開校させ、子弟の教育にも熱心であった。また、戦後の農地改革では46町分の田畑を小作民に開放した。明治初期の山方手永の25ヵ村は、上六名村、下六名村、上明大寺村、下明大寺村、戸崎村、羽根村、柱村、針崎村、上和田村、井内村、野畑村、下和田村、坂左右村、国正村、定国村、中村、正名村、二軒屋村、永井村、永野村、上羽角村、下羽角村、野場村、野崎村、駸馬村であった。

なお、正名町の幟には、正名二軒屋中という文字が染め抜かれている。

● 御田扇祭り巡行の実際

ここでは、平成24年7月1日（日）の坂左右町から野畑町に送ったときの様子を報告する。

送る側として、最大の人を要するのは、巡行の時である。行列の様子を記録すると以下のようなになる。

道中清め：2名（坂左右～野畑） 禰宜 先導（杖）：2名 長老 先導役員：4名（総代・副総代・生産組合長・信徒総代） 御田扇委員：3名（第3区委員長（代表）定国町、第1区委員長 若松町 第2区委員長 坂左右町 御幣1基：1名 榊樽1基：5名 高張提灯1対：4名 赤扇1本「山方手永」：2名 御神輿1基（御神符…豊受大神）：8名 御神輿の台2基：2名 日月旗（上に銀玉3個、赤幟）1対：4名 白扇「山方手永」1本：2名 雪洞（上に金銀の玉）1対：6名 花傘1基：4名 各町幟「天照皇大神」（送る年に新調）13本：26名 計75名である。

次に当日（送る側）のタイムスケジュールを記す。

6：00	祝砲（3玉）
8：00	会場作り
11：30	坂左右神明社全員集合（早めの昼食後集合） 渡御行列受け持ち担当確認
11：45	来賓（御田扇役員3名）・式典参列者手水・交通整理員配備
12：00	遷座祭式典 祝砲（5玉）
12：20	直会・総代挨拶

- 1 2 : 3 0 ご神前余興（奉納踊り）
- 1 3 : 1 0 交通整理員（4名）配備
- 1 3 : 2 0 威儀物整列、出発お祓い
- 1 3 : 3 0 坂左右町神明社出発 祝砲（3玉）
- 1 4 : 0 5 休憩所 到着（坂左右町地内）
- 1 4 : 1 5 休憩所 出発
- 1 4 : 3 0 下和田犬尾神社 到着
- 1 4 : 5 0 下和田犬尾神社 出発
- 1 5 : 0 0 下和田町野畑町境到着・野畑町氏子合流・引き継ぎ式
- 1 5 : 1 5 下和田町野畑町境出発
子ども用雪洞など5基を鉾神社手前で野畑町子ども
会に渡す。
- 1 5 : 3 0 野畑町鉾神社到着（祝砲）
 - ・御神輿本殿に鎮座
 - ・威儀物目録読み上げ
 - ・威儀物受け取り
- 1 5 : 5 0 坂左右町の奉納踊り
- 1 6 : 3 0 鉾神社式典 副総代指示により坂左右町は帰る。
- 1 7 : 3 0 反省会（公民館にて町内全員）

（3） C型（川西地域型）川西手永の場合

川西手永とは、岡崎藩領西南部で、矢作川西岸沿いの旧碧海郡である。岡崎市矢作地区と安城市東部にまたがる範囲で実施されていた祭礼・行事である。近世後期、川西手永に属していた村は、35ヵ村。石高：11,951.423石、人別：8,567人。村名を記す。東矢作村、西矢作村、筒針村、上渡村、下渡村、東牧内村、上佐々木村、下佐々木村、村高村、川嶋村、姫小川村、小川村、寺領村、木戸村、藤井村、古新田村、新々田村、嶋村、坂戸村、小望村、池端村、西牧内村、桑子村、八村、上条村、山崎村、高木村、別郷村、牧内新田村、東別所村、西別所村、宇頭茶屋村、尾崎村、宇頭村、田町分である。

以下、矢作神社に残されている史・資料をもとに報告する。

① 御田扇祭り巡行の実際

この手永の御田扇祭りは、昭和36年（1961）を最後に中止されている。大庄屋は、下佐々木の太田家で、祭りは旧暦の6月1日に行われるのが原則であった。記録によれば、明治29年（1896）の御田扇祭りは、7月11日（旧暦6月1日）に神輿が矢作神社に納められていた関係上、矢作町から出発している。巡行順を示すと以下のようなになる。

11日矢作→筒針（泊）、12日渡→東牧内（泊）、13日上佐々木→下佐々木（泊）、14日（以上、岡崎市）村高→福地（泊）、15日木戸→藤井（泊）、16日寺領→小川（泊）、17日姫小川→川嶋（泊）、18日河野→（以上、安城市）坂戸（泊）、19日東嶋→西嶋（泊）、20日小望→池端→西牧内（泊）、21日桑子→富永（泊）、22日新堀（以上、岡崎市）→上条（泊）、23日山崎→高木（泊）、24日大岡→北山崎（泊）、25日別郷→東別所（泊）、26日西別所→宇頭茶屋（泊）、27日尾崎（以上、安城市）→宇頭（泊）、28日北本郷→矢作（以上、岡崎市）へと18日間かけて、川西手永を一巡している。

この巡行順は、矢作から筒針へ廻る「右廻り」と矢作から北本郷へ廻る「左廻り」が1年交代で行われていた。矢作町の近隣のムラでは、早く廻ってくる年と、逆廻りになって遅く廻ってくる年があり、「早廻り」とか「遅廻り」と言っていた。

5年後の明治34年（1901）の記録では、7月16日（旧暦6月1日）に矢作を出発し、明治29年の廻りとは逆に、16日矢作→北本郷（泊）、17日宇頭→（以上、岡崎市）尾崎（泊）、18日宇頭茶屋→西別所（泊）、19日東別所→別郷（泊）、20日北山崎→大岡（泊）、→21日高木→山崎（泊）、22日上条→（以上、安城市）新堀（泊）、23日富永→桑子（泊）、24日西牧内→池端→小望（泊）、25日西嶋→東嶋（泊）、26日坂戸→（以上、岡崎市）河野（泊）、27日川嶋→姫小川（泊）、28日小川→寺領（泊）、29日藤井→木戸（泊）、30日福地→村高（泊）、31日（以上、安城市）下佐々木→上佐々木（泊）、8月1日東牧内→渡（泊）、2日筒針→矢作（以上、岡崎市）へと、明治29年の場合と同じ18日間かけて川西手永を逆に一巡しており、泊りのムラも1年おきになっている。

巡行するムラは、1日平均2村。夕方着いたムラで泊り、翌日午後1時頃出発する。ムラの規模が違うため、小さいムラでは、たくさんあった小幟を、一人でも何本も保持し、子どもも動員して運ぶムラもあった。また、かなりのムラでは法螺貝を吹きながら行列したことが伝承されている。行列は、男子のみで行い、夜は「オトマリ」とか「ヨゴモリ」と呼ばれ、主に若い衆が神輿の番をするのが通常であった。

神輿は、明治中期頃まで、大庄屋のあった上佐々木の太田家に安置されており、毎年、大庄屋を中心に祭礼が執行されていた。また、各ムラでは、「扇さんの行列が来るまでに、田の草を取っておかないと恥ずかしい」と伝承されている。これらのことからすると、御田扇祭りは、単なる虫送り行事ではなく、明らかに岡崎藩の意向が反映していた祭礼行事と位置付けることも可能である。

しかし、昭和16年（1941）、戦争のために中断され、矢作神社のみで継続されていた。昭和27年（1952）、「御田扇祭復活の案内」が出され復活す

る。

「拝呈、入梅も明け、愈々本格的な暑さがやってまいりました。御一同様には、益々 御多祥の御事と存じ心より御同慶申し上げます。陳者農作物の豊作を祈念する伝統的行事である皇大神宮の御田扇祭は、諸種の事情により過去十年近く中止のやむなきに到り今日に及びました。此の間独り矢作神社に於いて祭事を執行致していましたが、講和条約発効を記念致しまして、本年より再び復活して年中行事と致したく存じます。

各御関係の御村落に於いては突然のことにて種々御事情も生ぜらるることとは存じますが、五穀の豊穰を祈念する行事のこととございますから何卒御諒承下さいまして御協賛の程をお願い申し上げます。つきましては神輿到着の際は公私御多用にて甚だ恐縮とは存じますが奉迎下され、且つ次字へ御奉遷下さいませ様重ねてお願い申し上げます。

事前に御諒解を得べきが本意のところ余日なきため、失礼ながら文書を以って右御願ひ旁々御依頼まで申し上げます。 敬具

昭和二十七年七月十七日

碧海郡矢作町大字矢作

矢作神社

御田扇祭世話係

川喜多広吉

三井 三二

安藤初太郎

鋤柄 護夫

加藤徳三郎

殿

追伸

神輿御到着の日時は後日御通知申し上げます。」

昭和27年7月21日 矢作神社 川喜田広吉より

「謹啓 先般は当矢作神社の総代が御多用中突然参上致しまして、御田扇祭実施につき早急なる御願ひ申し入れましたところ貴字を始め関係各字におかれましては格別の御厚意と御理解を以って快よく御協賛くださいましたことを謹んで深く御礼申し上げます。

実は永らく中止のままと相成って居りました為、詳細なる記録もなく準備万端不行届きにて種々御迷惑相かけることを存じ誠に恐縮に存じます。

尚又御村落におかれても合併分立等のことあり御順路御駐留等も従前とは当然変更の要を生ぜらるることと存じますが一応別紙の通り日程を決定致しましたから本年の処は格別の思召し以って御寛大に御取計い願ひ上げたく隣接各字と宜敷く御連絡の上御奉迎下さいませよう伏して御願ひ申し上げます。」

上記2点の書簡により10年間中止されていた御田扇祭りは昭和27年（19

5 2) 当時の関係者の努力、とくに矢作神社宮司川喜田広吉の努力が実を結んだ結果であることがしっかりと読み取れる。そして、川西手永は、中止から復活と江戸期の巡行(村)形態をしっかりと現代まで伝承してきた唯一のタイプである。復活して10年ほど継続されたが、昭和36年になると、祭礼を辞退するムラも出てきた。安城市尾崎町では、昭和36年6月26日付で、御田扇祭りを辞退する以下の文書を提出している。

「岡崎市矢作町御田扇祭係御中

標記の件につき左記の事由に依り御辞退申し上げ、右御取計ひ下さる様本文を以てお願い申し上げます。

記

事由

- 一 当町の農耕地の中心に新国道開通し、自動車等の交通量日に日に増大
- 一 若手青年等就職甚しく、みこし、作り物等担ふ者減少
- 一 評議委員会、総会に於ても相談、協議、承認を得」

この年は、伊勢への代参も済んでいたため、何とか行われたのが実情であった。しかし、翌年下記の廃止文書が出され、再び中止となってしまった。

「拝呈 暑さきびしい愈々ご清栄の段お喜び申し上げます。先般ご依頼致しました御田扇祭の件に付きましては早速ご回答いただきまして誠にありがとうございました。ご由緒と永い歴史をもつ年中行事でしたが、皆様方のご意向に従って中止を決定致しました。つきましては、当矢作神社に於て御田扇祭を執行してはどうかというご意見もありますので、とりあえず本年は左記のとおり執行いたしたく存じます。暑い折しかも遠路のところ恐縮ですが何卒ご参拝の程お願いします。

昭和三十七年七月十八日

矢作神社社務所

岡崎市矢作町字市場三十八

御田扇祭関係町代表者殿

川喜田広吉

記

- 一 日時 七月廿七日 午後二時から
- 一 場所 岡崎市矢作町 矢作神社
- 一 行事 御田扇祭執行及び今後の運営方法について協議」

こうして昭和36年を最後に川西手永の巡行形態をとる御田扇祭りは再度の中止に追い込まれた。昭和35年東洋レーヨン岡崎工場の完成、昭和37年碧海郡六ツ美地区の岡崎市への合併、矢作町地内の国道1号線バイパスの完成などの社会状況の変化が再度の中止に追い込む背景であったと想像される。その後、矢作神社で関係者のみで行われていた御田扇祭りも昭和51年(1976)に中止された。

① 川西手永最後の御田扇祭り聞き書き

昭和36年に行われた川西手永最後の歴史的なそして、おそらく二度と復活される

ことはないと思われる御田扇祭りの記録を聞き取り調査で復元する。

【陸渡御で使用されたモノ】(単位は寸)

- ア 提灯2張(径34、長さ60)(御田扇の字句あり)
- イ 大幟1本(縦373、横67.2)(皇大神宮御田扇祭の字句あり)
- ウ 造り物1台(縦75、横52)(酒樽に菰を被せ、その上に五穀で作ったその年の干支に因む動物を鳥居の中に入れて飾る)
- エ 日月旗2本(縦92、横32)(白地に金糸と銀糸で月と星の形)
- オ 真榊輿1台(48、横48、高さ40)(鉢の中に高さ90くらいの榊が植え込まれている)
- カ 鋒2本(長さ165)(赤地に本の字と立葵の紋あり)
- キ 大幣1本
- ク 神輿1組(縦41、横41、高さ95)(神輿の中には、御神体として、鋏に模した木の枝と、馬の絵が描かれた扇が入っている。賽銭箱付き。)
- ケ 花傘1本(径137)
(黒地に赤丸の扇を5本程付け、桜に模した神花と共に付ける)
- コ 神輿台2脚
- サ 小旗35本(縦180、横28.5)(各ムラより1本、村の名前あり。主に男の子が持つ)
- シ 上箱(巡行には使わない)・・・万延元年(1860)の墨書名あり。

(4) D型〔上野(長瀬)地域型〕上野(長瀬)手永の場合

第2次世界大戦までは、阿弥陀堂(現豊田市畝部西町)から、7月中旬頃に1日に1町で1ヵ月ぐらいかけて全町を廻った。戦後は阿弥陀堂で、この町内を1日に限って、次の地区またはその次の地区に送っていく形態をとっている。

近世後期の上野(長瀬)手永の規模と村名を記しておきたい。

37ヵ村 石高 10, 588.7414石 人数 7, 012人

八町村、中園村、東大友村、西大友村、橋目村、舳越村、森越村、北野村、粟寺村、馬場村、下村、下村会下新郷、上村、上村槌木新郷、国江村、阿弥陀堂村、中切村、上宗定村、下宗定村、川端村、中島村、配津村、渡刈村、鴛鴨村、西鴛鴨村、大林村、西田新郷、行村、永覚新郷、上村新郷、下村新郷、国江新郷、馬場新郷、粟寺新郷、広畔新郷、焼寺新郷、西野新郷の37ヵ村である。

大庄屋は中園の岩槻家、その後阿弥陀堂の伊豫田家が務めた。

● 御田扇祭りの現状

現在の岡崎・豊田の両市にまたがる上野または長瀬と称する手永は、文化文政の時分まで、中園の大庄屋の岩槻家で、それ以降は、阿弥陀堂の大庄屋の伊豫田家で、御田扇祭りの神輿を受け継いできた。

近世後期上野手永の規模は、37ヵ村、石高：10,588.7414石、人別：7,012人現在では、1日に限って、阿弥陀堂の西神明社で御田扇祭りが行われている。7月上旬の御田扇祭りには、旧来の上野手永の範囲に属して、岡崎市西北部の8ヵ所と、豊田市東南部の21ヵ所を含む29ヵ所の自治区から、それぞれ総代や区長などの役職者が、阿弥陀堂の西神明社に招かれるしきたりが守られている。

平成22年6月27日の場合を記録する。

当日10時には、西神明社の社殿で、御田扇祭りの神事が宮司を中心に営まれた。地元の阿弥陀堂の関係者のほかに、上野手永の範囲から、29の自治会代表として、岡崎市内からは各総代、豊田市内からは各区長が参列した。

14時30分から、西神明社の社殿で、神輿の発御式があつて、阿弥陀堂の自治会の役員を始め、その年度の宮係など、10数名ほどが参列して営まれる。

15時から、御田扇の神輿を中心に、ほぼ一定の順序に連なり、西神明社の境内から出て行って、阿弥陀堂の地内を廻り歩き、畝部小学校の校内から引き返し、西神明社の境内に立ち戻るルートで巡行が行われた。

15時30分から、神輿の還御の式が行われ、全日程が終了した。

御田扇祭りでは、まず宮司が祓幣を持って、四辺を祓って進み、大庄屋家の当主が塩を撒いて、沿道を清めていく。また2人の役員が、それぞれ竿の先に箱の形を取り付けた、梵天と呼ばれるものを掲げていく。その4つの面には、「御田扇祭」「五穀成就」「天下泰平」「部内安全」と書かれている。さらに、宮係の2人で御田扇の神輿を担いで行く。別の1人が傘鉾に扇を提げたものを保持して行く。本年度の傘鉾には、13本の白地の扇と4本の黒地の扇が下げてあつた。その傘の中に入ると、病気にかからないというので、かわるがわるこれに入っていた。

(5) E型（額田地域型）額田手永の場合

平成26年9月13日（金）午前9時より、藪田町神尾幸男氏（大庄屋神尾家6代目当主）・藪田八幡宮氏子総代 神谷鋼二氏・藪田1丁目総代 櫻井幹雄氏に聞き取り調査・八幡宮本殿の内部調査を実施した。その結果を報告するものである。

① 御田扇祭りの実際

近世後期、額田手永に属していた村々は、37ヵ村、石高：8,140.4602石、人別：5,610人である。属していた村名を挙げれば、次のようになる。能見村、伊賀村、稲熊村、井田村、井ノ口村、百々村、東阿知波村、西阿知波村、東蔵前村、磯部村、岩津村、八ツ木村、仁木村、西蔵前村、藪田村、大樹寺村、上里村、上大門村、大門新田村、中大門村、下大門村、日名村、米河内村、蔵次村、安戸村、新居村、小丸村、一色村、外山村、北須山村、蕪木村、大ヶ谷村、柳村、渡通津村、駒立村、折地村、上田代村である。

額田手永の御田扇祭りは、明治末までは行われていたと伝承されている。大正初期

には中止になり、それ以後、毎年6月には藪田八幡宮で藪田町氏子のみで神事が執り行われていた。(平成19年まで実施)

大庄屋神尾家の現在の当主は、先代より御田扇祭りについて次のように聞いていると懐かしそうに語ってくれた。

明治29年に子爵本多家より御田扇祭りのために金5円を拝領したと明治43年まで1年おきに左回り、右回りとなり37ヵ村を廻っていた。また、大庄屋である神尾家は米の出来具合を御田扇祭りで検見したと伝承されている。

額田手永の御田扇祭りが中止になってから、大庄屋の地元、藪田八幡宮に「田扇神」として祭神に昇格し、毎年「田扇祭」として6月に行われていた。

御田扇祭りは、毎年6月第一日曜日の9時より行われ、生産組合と奉賛会が中心となり神事が執り行われていた。神官は、小美町の浅井宮司、井田町の市川宮司が神事執行にあたった。参加人数は、30～40名ほどであった。月次祭の代わりに御田扇祭りを行ったとも伝承されている。しかし、御田扇祭りも平成19年を最後の中止されている。その理由として生産組合の組合員数が極端に減少(現在の組合員数3)したために執行が困難になったからである。この話の中で、たくさんの扇を見た記憶があるとの話題が出たので、その確認のために藪田八幡宮の本殿の中を確認させて頂いた。

② 本殿の御神体調査

神尾家での聞き取り調査をいったん中断し、藪田八幡宮の本殿の内部調査に取り掛かった。田扇神の御神体が入っている祠は、向かって左に存在した。

祠の法量：高さ・515 幅・310 奥行き・152

中に入っていたもの：大麻2点 春木太夫の銘あり

外宮大麻1点

扇：18本

内訳

5本扇：3 (未使用1)

6本扇：15 計：18本

扇の法量：広げた最大値で計測

5本 210

6本 300

扇の絵柄：曳き馬・稲・・・馬右向き

7本(6本骨扇)

曳き馬・稲・・・馬左向き 2本

(6本骨扇)

船・宝珠・米俵・・・6本(6本骨扇)

曳き馬・稲・・・馬左向き 3本

(5本骨扇)

③ 成果

調査を終えて、御田扇祭りは、必ず伊勢から扇を請けて来てこれを神輿に御神体として乗せ各村々を廻ったものと確信できる資料である。

額田手永では、明治43年に御田扇祭りが中止となり、大庄屋のあった藪田で田扇神として伊勢から請けてきた扇が御神体として祭祀されるような形になったものと考えられる。この動きを加速度的に推進した背景として、御師春木大夫の存在も見逃すことが出来ない。

額田手永の御田扇祭りは、時代の前後はあるが、現在のところ中止の状態におかれている。額田手永は、田扇神という形で地区の産土神として祀られ、崇敬を受けている。従って中止という表現を使った。

(6) F型(東山中地域型) 東山中手永の場合

六手永中最大の村数と石高を抱える手永である。大庄屋は現在の洞町の永井家である。その現状を記録することを試みるものである。

① 御田扇祭りの実際

東山中手永の御田扇祭りは、明治後半には中止(巡行)された。現在は、8月の第一日曜日の13時より御田扇社祭りを執行し、役員や崇敬者が参列し、行われている。五穀豊穰と虫よけを祈る。この時に、幟7本を立てる。「御田扇大神宮」と青地に白抜ききの幟が6本、赤地に墨書の幟が1本が小鳥居(寛文7年・1667)に建てられた「明神型鳥居」の両サイドに立てられる。

近世後期東山中手永の規模は、42ヵ村で、石高:7,381.2814石、人別:5,962人であった。以下に東山中手永に属していた村名を記しておく。

欠村、友久村、栗木村、須渕村、鍛冶屋村、上村、麻生村、名ノ内村、小楠村、下毛呂村、上下呂村、初山村、蘭村、桃久保村、中保久村、伊賀谷村、岩屋(谷)村、中畑村、大井野村、板田村、田口村、箱柳村、小呂村、洞村、秦梨村、茅原沢村、桜井寺村、切越村、古部村、高落村、法味村、大河村、大山村、須山村、木下村、岡村、舞木村、羽栗村、池金村、鳥川村、亀穴村、石原村

② 聞き取り調査の記録

ア 小呂町

見たことはないが、あったということを親から聞いた。箱柳町から来て、小呂町へ送ったように記憶している。ウンカ送りも昔はあった。

イ 洞町

父から聞いた話だと、毎年このムラから扇さんが出て、東山中手永の42ヵ村を廻った。洞町→欠町→箱柳町→小美町へと、順に神輿を送った。明治後半には中止されたが、大正初頃、一度だけ復活したという。復活した理由は、各ムラか

ら、扇さんが出ないとさびしいからだという話を聞いた。2疋くらいの赤や白の幟が10本くらいと、神輿が出たという。神輿は、八柱神社に現在もある。そして毎年扇さんの祭り（月中旬春祭りを扇さんの祭りと称していた）とって行われている。

社史の中に、「1892年（明治25）5月 子爵本多忠敬公より、立葵紋付高張提灯並びに御田扇様へ金25円を賜る」とある。

ウ 欠町

祖母から、あったと聞いた。洞町から来た。明治の終わりごろに無くなったと聞いている。

③ 現在の祭礼状況

明治後半に巡行は中止され、八柱神社での御田扇祭りとして行われている。現在は、8月の吉日の御田扇社祭（別宮 御田扇社として祭祀）を執行し、役員や崇敬者参列して継続されている。

以下、『洞町のあゆみ』（平成14年6月1日 洞町史編集委員会）の八柱神社社藏記録の「八柱神社と別宮」の項に御田扇祭りについての記載が次のように載っている。

「当東山中手永では、田植えが終わった後、稲を虫害から守り、豊作を祈願して神輿が管内の村々を巡回しました。行列の先達は法螺貝を吹き、笛や太鼓の鳴物入りで、提灯や大旗・錦樽が連なり、神輿の後に花笠や小旗連が続き、羽織袴の盛装者を含めて、7、80人に上る行列でした。

大庄屋の村を始点に、管内42ヵ村を一回りすると、泊りがけで十数日もかかりましたが、娯楽の少ない当時としては楽しいお祭りであったようです。

明治25年子爵本多忠敬公より、御田扇様へ金25円を賜りましたが、参加人員・経費等の関係で辞退する村が出るなど次第に減少し、明治の後半には中断されました。

現在は8月の第一日曜日に御田扇社祭を執行し、役員や崇敬者が参列しています。」

また、社史によれば、平成13年10月に別宮を新築し、その中に御田扇社が祀られている。

御田扇社の祭神は、「豊受大神宮」で御神札が入っていた。これは、毎年代参で請けてくるという。隣の御田扇祭りで使った神輿の中には、お白石が4個と「大麻春木大夫銘」ありが1点入っていた。

（7）伊勢神宮との関わり

御田扇祭りの発生、起源を考える場合に伊勢神宮とのかかわりを忘れてはならない。後本多時代のB型（山方地域型）、C型（川西地域型）、E型（額田地域型）、F

型（東山中地域型）から扇・鍬型が御神体として神輿の中に入れていたことが今回の調査で明らかになった。さらに、伊勢御師の「春木太夫」の大麻3点、外宮大麻1点も確認できた。

以下、伊勢御師のかかわりについて概略を述べておきたい。

御田扇祭りの在地定着に大きな役割を果たしたと思われる伊勢御師（おんし）の動向について若干の検証を試みたい。※御師（おし/おんし）を伊勢神宮では「おんし」と言う。

伊勢神宮が内宮と外宮とに別れていることに相応し、御師も内宮と外宮に区分されていた。宇治に居住する内宮御師と山田に居住する外宮御師は、総数においても檀家数においても相当な差が生じている。

三河国内で活躍した内宮御師数は、明治初期において21名に及んでいる。三河全体を網羅している御師はおらず、ほとんどが一つか二つの郡にしか関連していない。

これに対して外宮御師の状況は、数量・規模ともに内宮御師を圧倒している。享保12年（1727）には609人（総檀家数428万余戸）も存在していた。「安永六年外宮師職国旦那家数改覚」でも、ピーク時より少しは減少するものの、全体で499人（総檀家数496万戸）を数えることが出来る。その内、三河国内に檀家を持つ御師は12パーセント強の54人に及び、伊勢・武蔵・尾張・美濃・近江に次、6番目の多さである。

檀那の階層を見てみると、安永期の春木隼人（春木文夫銘）は、本多中務大輔と内藤丹後守の両名である。前者は岡崎藩主、後者は挙母藩主である。春木大夫が岡崎藩主である本多氏（後本多）の御師であり、本多氏の転封と共に移動して来ている事実がある。

このことは、御師が藩主・藩士・民衆という階層にそれぞれ役割分担されており、地域区分での把握でなく、あくまでも人の把握のつながりを尊重されていたことを示すものである。

御師もしくはその名代の檀那廻り、御幣を配る目的で毎年実施された。そして、この御師たちの呪術性については、足立弘訓の『御師考証』の付録編にそれを示す状況が見出される。それは、室町時代の内宮長官荒木田氏経の書いた幾つかの書状の中に見出すことが出来る。「大神宮の神供品を上納の道中で掠奪するような輩は〈神敵〉である。もし不法な行為を止めない時は〈神宮の法を以て、神木、神灰によって沙汰をする〉と言っている。これはまさに、護摩の灰の呪力を以て調伏する、密教の祈祷を思い起こさせる。

従って、伊勢大神宮の御師は今日の神官等と違って、特殊な呪力を持つ者として畏怖されていたと思われる。御師たちの授ける御神札であるとか扇などは、一種の呪物であったと解釈してよいと思われる。御田扇祭りの神輿の中に入っている七本骨の田

扇も、絵柄を見ると蛭子大黒（これは陰形と陽物を象ったもの—山方手永で使用していたもの—平成23年の調査で確認）は、ただ単に虫除けだけでなしに、豊作をもたらす靈験のある靈物として珍重されたと思われる。伊勢神宮から配られる物は、鍬であれ、扇であれ、御神札であれ、それらはすべて最も尊い神の靈力の備わったという信仰が、伊勢信仰の在地定着と拡がりを示した要因であると思われる。そのメッセンジャーが御師であったと規定できると考えられる。

以下に岡崎藩と伊勢神宮との関わりについての文献史料を示しておく。

内田家文書 御用留 文化十四年

勢州御祓可相渡間、忌服相改麻上下着用致、明後五日朝五ツ時過此方役所江被出可被申候、為其申入候、以上

二月三日 奉行所
大庄屋 鈴木幸吉
同 孫右衛門

然ハ御田扇之内江相納候御札、御納戸ニ而相渡候間、明後五日朝五ツ時過兩人へ申合、請取ニ罷出可被申候、為其申入候、以上

二月三日 奉行所
六手永

大庄屋中

これは、額田手永大庄屋内田家の文化14年(1817)御用留に記されるもので、藩奉行所から大庄屋の鈴木幸吉と孫右衛門に「勢州御祓」、伊勢神宮祓札を渡すので出頭を命じ、さらに田扇の内に納める御札を御納戸で渡すので大庄屋兩人と申し合わせ、請取りに出向くことを六手永大庄屋に伝えたものである。文脈からすると田扇に納める札というのは伊勢の祓札であろう。近世の御田扇祭りにおける伊勢信仰との関わりを示す数少ない文献史料である。岡崎藩では天明元年(1781)の「岡崎・江戸御扶助様帳」(『中根家文書』下所収)では伊勢御師の山本大夫と春木大夫の兩人に米四十俵余を扶助し家中扱いとしているが、田扇の使われる御札もこれらの藩と特別な関係にあった伊勢御師により藩に持たされたものであろう。このような仮説から、岡崎藩としての受容がかなり現実味を帯びてくるような感じがする。岡崎藩主が伊勢御師の教えで、藩の統治と五穀豊穰を願うために取り入れた流れも考えられるような事例である。

(8) 田扇祭りの評価(今後に向けて一子どもたちに伝えていくべき心=ふるさととは一)

3年間の追跡調査を重ねたことによって、幾つかの新しい事実が確認できた。以下、列記しまとめる。

- ・御田扇祭りの文献の初見は、現在のところ宝暦年間(1751~1763)である。この頃は、手永から手永へ神輿を引き継ぐ形態であった。

- ・巡行形態は、20日余りで手永中を巡る。大庄屋の居村から出て、大庄屋へ還御し、1年ごと廻り順が反対になる。手永内で完結する形態（後本多家時代より）
- ・岡崎藩の施策の一環として、伊勢の扇を五穀豊穡の象徴として利用
- ・岡崎藩主と伊勢御師の密接な関係が明らかになった。
- ・御田扇祭りは、大きく3段階の変容を遂げている。
- ・扇と鋤型を引き継いでいく形態が、本来の型
- ・6形態の御田扇祭りが存在
- ・御鋤信仰との関連が密である。

（報告者の独り言）

自然一神一人の三者関係の中で培われてきた生活文化の集合体がふるさと（＝一人一人の心の中で醸成される心の拠所）である。そして「無縁」から「絆」の地域社会の復活を目指すための重要な素材としての御田扇祭りを伝えて行くことが今の大人の役割であると考えます。



大嘗祭悠紀斎田千齒扱きによる脱穀

大嘗祭悠紀斎田千齒扱きによる脱穀

写真資料



奉公者斎田八（悠紀斎田お田植神事）



田均し（悠紀斎田）



斎田へ苗（「萬歳」）を入れる（悠紀斎田）



早乙女によるお田植（悠紀斎田）



苗渡しは小学生（悠紀斎田 六ッ美南部小学校6年生女子）



早乙女・奉公者によるお田植仕上（悠紀斎田）



堤通り手永巡行（御田扇祭り 中之郷→上青野）



サカムカエ（御田扇祭り 上青野の代表が請ける）



上青野神宮へ到着（御田扇祭り）



山方手永巡行（御田扇祭り 野畑→針崎）



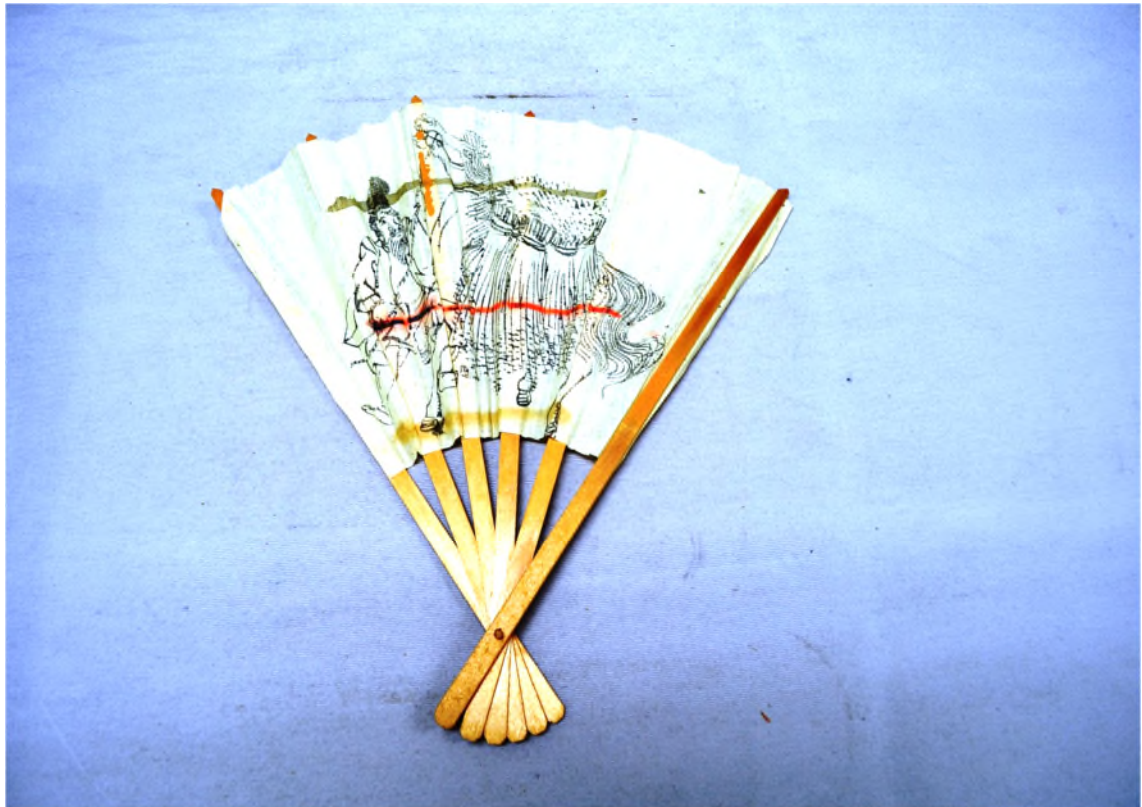
白扇と雪洞（御田扇祭り）



サカムカエ（御田扇祭り） 針崎が請ける・・・左側



伊勢御師大麻（春木大夫）



御神体の扇（御田扇祭り 額田手永）



御神体の扇（御田扇祭り 額田手永）



御神体の鍬型（御田扇祭り 川西手永）

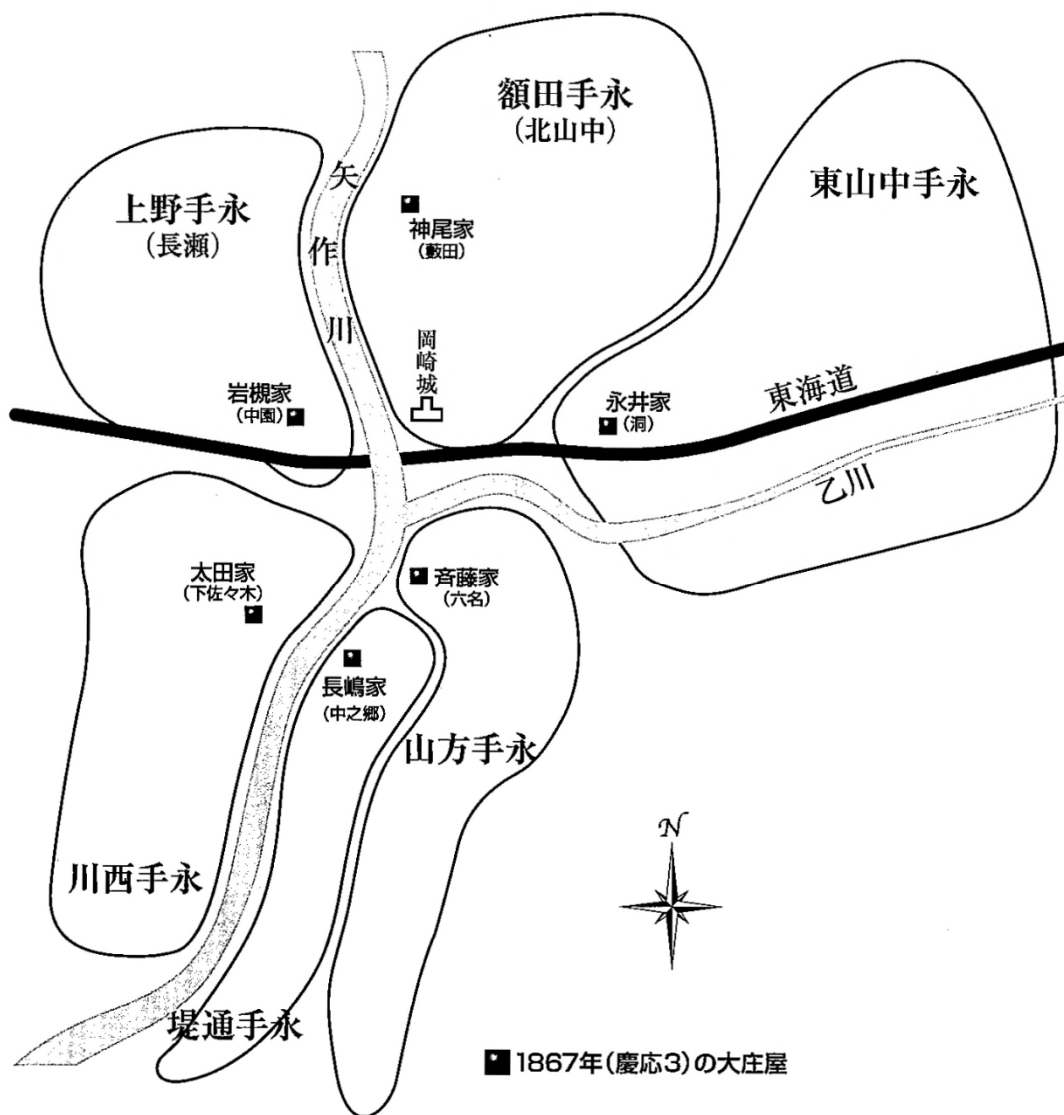


図1 手永配置図

手永配置図（『御田扇祭り調査報告書』岡崎市教育委員会,2013年,p4より転載）